

---

# 二者択一

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二者択一

### 【Nコード】

N9063S

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

将暉はきになる相手が二人いた。どちらに告白しようかと悩み選んだのは。オムニバス形式の作品です。恋愛ものになります。

## 第一章

### 二者択一

この時だ。彼は悩んでいた。

首藤将暉は大学生だ。少しだけ吊りあがったはつきりとした二重の目に眉間から端にいくにつれ濃くなって太くなる眉を持っている。顔立ちは涼しげで唇は薄いピンクだ。細い頬をしていて黒い髪から見える耳が大きい。

背は普通位で整ったスタイルである。その彼が今悩んでいた。

その彼にだ。ほぼ同じ顔の母が尋ねた。

「どうしたのよ、一体」

「うん、実は」

彼はその母に悩みを打ち明けようかと考えた。少し考えてからこう言うのだった。

「好きな人がいるんだ」

「あら、あんたもそういう人ができたの」

母はそれを聞いて興味深そうな声をあげた。

「よかったじゃない」

「うっん、それはそうだけれど」

「何か嫌なの？」

「嫌じゃないよ」

それは否定するのだった。

「ただね」

「ただ？」

「二人いるんだ」

こう言うのだった。

「実は」

「二股とかいうの？」

「そうなるかな。同じ大学の娘でさ」

その娘がどういった娘なのかも話すのだった。

「どっちもね」

「どっちもなの」

「一人は白い可愛い服を着てさ」

ここから話すのだった。

「凄く可愛い女の子なんだ」

「そうなの」

「そしてもう一人は」

もう一方の娘についても話すのだった。

「黒い。ええと」

「黒い？」

「ゴスロリっていうのかな」

その娘の服装を思い出している言葉だった。

「そういう服の女の子でさ」

「その娘もなのね」

「どっちもさ」

彼は言うのだった。

「凄く可愛いんだよね」

「二人共好きなのね」

「大好きだよ」

実際にそうだというのである。

「いや、本当に」

「けれど相手はね」

「一人じゃないといけないしね」

「付き合うなら一人にしておきなさいよ」

母の言葉はここでは忠告になっていた。

「それは絶対にね」

「二股はよくないよね」

「よくないし災いの元よ」

そうだというのである。

「それはね」

「ああ、やっぱり」

「どっちかにしなさい」

母の言葉は強いものになった。

「いいわね、それで」

「うん、わかったよ」

「それでどちらにするの？」

もう早速このことを問う母だった。

「それで」

「ううん、そうだな」

彼はここで考えたのだった。そうしてだ。

・ 白い娘を選択 第二章へ

・ 黒い娘を選択 第三章へ

## 第二章

白い娘を選んだ。そうしてであった。

大学に行く。そうしてその娘を探した。

「ええと、あの娘は」

キャンパスの中を歩き回る。そうしてであった。

何しろ意識しているのですぐに見つかった。その娘にだ。

黒いロングヘアではっきりとした強い光を放つ目だ。切れ長で二重である。口元は引き締まり整っている。背は割かし高く一六六はある。

白くひらひらとした丈の短いスカートに同じ色のブラウスとカーデイガンである。その姿がまさにトレードマークになっていた。

スタイルは胸はあまり大きくはないが白くひらひらとしたスカートから奇麗な脚が見える。その彼女の姿を認めてすぐに言うのだった。

「あの」

「はい？」

「ええと、僕は首藤将暉といいますが」

「経済学部ですね」

「えっ!？」

向こうから所属の学部を言われて思わず声をあげてしまった。

「知ってるんだ、僕のこと」

「前から気になってましたから」

にこりと笑って話す彼女だった。

「私はですね」

「ええと、御名前は」

「松本凜です」

自分から名乗ってきた。

「教育学部の二回生です」

「そうですね、確か」

「それで首藤さんも二回生ですよ」

「このことも知っている彼女だった。」

「そうですね」

「ええ、その通りですけど」

「それで今ここに来られたのは」

「凜から言い続ける。」

「デートにですね」

「うっ、それは」

「私をデートに誘いに来てくれたんですよ」

「にこりとして話す彼女だった。」

「そうですね」

「その通りですけど」

「じゃあ何処ですか？」

「ここでも彼女からだった。」

「何処に行きますか？何時何処に」

「次の日曜に」

彼女のペースで話が進む事に戸惑っているがそれでも言う将暉だった。

「場所は野球場で」

「甲子園ですね」

「ええ、そこで」

「確か。首藤さんは阪神ファンですよ」

「えっ、それも知ってるんですか」

「ずっと私のこと見てくれてましたよね」

「そのことも気付いている彼女だった。既にだった。」

「ですから。私はソフトバンクファンですけど」

「パリーグ派だったんだ」

「けれど巨人は嫌いですから」

これはきっぱりと言う彼女だった。

「阪神対巨人ですね。観ましょう」

「はい、それじゃあ」

こうして彼女のペースで阪神の試合を観に行くことになったのだ  
った。

第四章へ



### 第三章

黒い服の娘に告白することに決めた将暉は大学に行き彼女を探した。その時に友人に協力してもらった。

そうしてだ。教育学部の棟によくいることがわかった。友人と共にそこに行く彼だった。

そこに行くのだ。真つ黒く装飾の多い、まさにゴスロリといった服装の女の子が出て来た。髪は黒のロングヘアで切れ長の強い光を放つ目を持っている。眉は細く流麗なカーブを描いている。

ストキングは太腿までだ。やはり黒だ。その彼女が名乗ってきた。

「松本凜といいます」

「松本さんですね」

「はい」

おずおずとして答える彼女だった。

「あの、それで一体」

「実は」

将暉からだ。言うのだった。

「今度の日曜ですね」

「日曜ですか」

「よかったら甲子園に行かれますか」

こう提案するのだった。

「僕と一緒に」

「貴方とですね」

「あつ、僕の名前は首藤将暉といいます」

ここで名乗る彼だった。

「経済学部の一回生です」

「経済学部の方ですか」

「ええと、松本さんは教育学部ですね」

「はい、そうです」

こくりと頷く彼女だった。

「それで私も同じです」

「二回生ですか」

「はい」

その通りだというのである。

「同じですね」

「そうですね。それでいいですか？」

「デートのことですね」

「嫌ですか、野球は」

「いえ、御願います」

おずおずとした声での返答だった。

「それじゃあ」

「はい、じゃあ今度の日曜に」

「御願いますね」

こうしてだった。将暉は笑顔で応えた。そうしてであつた。二人はデートをすることになったのだった。将暉の望み通りになった。

第五章へ

## 第四章

将暉は駅で凧と待ち合わせる。すると彼女はあの白い服とやけに大きな白い鞆を持ってやって来たのであった。

彼はその鞆を見てまず言った。

「ええと、それは」

「鞆のことね」

「うん、それ何かな」

こう彼女に問うのであった。少しきよとした顔で。

「その鞆は」

「あつ、これはね」

「それは？」

「後でわかるわ」

にこりと笑って彼に言うのであった。

「後でね」

「後でねって」

「まあまずは野球よ、野球」

凧は話を遮ってきた。

「行きましょう」

「うん、それじゃあ」

こう話してだった。甲子園に向かう。そして一塁側に座るのだった。

そうして応援する。まずはだ。

二人はグラウンドを見てだ。それで言い合う。

「それだけでれどさ」

「どちらが勝つかね」

「うん、どっちな」

こう話す将暉だった。

「果たしてどっちが勝つかね」

「多分だけれどね」

ここで凜が彼に話す。

「今日は阪神が勝つわね」

「相手がマエケンでも？」

「うん、それでもね」

勝つというのである。

「何故かっていうとね」

「うん、どうしてなの？」

「ほら、今日のナインの動き」

グラウンドにいるそのナインの動きをだ。見ての話だった。

「いいでしょ」

「そうかな。ちょっとわからないけれど」

「特に城嶋がね」

キャッチャーである彼を見てだ。凜はまた将暉に話す。

「凄く動きがいいから」

「そつえば普段より元気かな」

「そうよ。だからね」

「阪神が勝つんだ」

「兄貴もいいし」

凜は今度はレフトを見た。そこには金本がいる。彼も見えて話すのだった。

「今日もね」

「兄貴なあ」

「肩はまだ万全じゃないけれど」

それでもだというのだ。

「それでもね。やれるわ」

「そうだったらいいけれどね」

「まあ観ていたらわかるわ。阪神今日は打つわよ」

「是非そうして欲しいね」

こんな話をして試合を観るのだった。するとだ。

凜の話通りだった。阪神打線は序盤から打ちまくる。

それでだ。気付けばだ。

「五回終わって十点入れたね」

「もう試合は決まったわね」

「そうだね。ピッチャーは今は不安だけれど」

「それでもだと。将暉も言う。」

「それでもね。このままね」

「いけるわよね」

「いけるよ」

その通りだと話す彼だった。

「何か言う通りになったけれど」

「凜でいいわよ」

「名前呼んでいいんだ」

「ええ、是非ね」

こう言っただった。そうしてである。

試合を最後まで観る。結局そのまま阪神が勝った。本当に凜の予想通りだった。

それで試合の後マクドナルドに入っただ。そのことを話すのだった。

「いや、本当にさ」

「まさかと思っただしょ」

「正直今日はまずいかもって思っただよ」

実に素直に話す彼だった。チーズバーガーを食べながら。

「マエケンだから」

「マエケン怖いのか？」

「いいピッチャーだからね。野球はやっぱピッチャーじゃない」

「それはそうね」

「だからね。打てるかどうか心配だったけれど」

それでもだというのである。

「打てたね」

「そうね。それでだけれど」

「うん。何？」

「この後どうするの？」

「この後ね」

「そう、どうするの？」

また将暉に話す。

「これからね」

「そうだね。後は」

「後は？」

「飲みに行く？」

こう提案する彼だった。

「居酒屋か何処かに」

「じゃあバーはどうかしら」

「バーね」

「そう、いいお店知ってるのよ」

彼女から話してだった。そうしてだ。

彼等はだ。その行く先を決めた。そのバーに行くのだ。

あえて照明を暗くさせた大人の雰囲気醸し出す店に入るとすぐだった。凜は将暉に対してこんなことを言ってきたのだった。

「あのね」

「うん、いいお店だね」

「そういうのじゃなくて」

そうではないというのだ。

「ちよっとね。カウンターで待ってて」

「あっ、うん」

トイレに行くというのだ。それは言葉の外にあり行間を読んでのやり取りだった。彼はカウンターに向かった。凜と一旦別れてだ。

その時にだ。凜はくすりと笑って彼に囁いてきた。

「このお店黒を基調にしてるわね」

「うん」

「そう、黒だからね」

こう囁いてだった。彼女は一旦姿を消したのだった。  
そしてであった。カウンターの彼の前に出て来たのは。

第六章へ

## 第五章

凜はおずおずとしてだ。将暉に言ってきた。

「あの」

「うん、中に入ろう」

「はい」

彼に寄り添うようにして彼の言葉に頷く。そうしてだった。甲子園の中に入るだった。その甲子園はだ。

「一塁側ですよ」

「阪神ファンだからね」

だからだと答える彼だった。

「そこでいいよね」

「はい」

こくりと頷く凜だった。

「御願います」

「さて、試合を観ようか」

こうして二人は一塁側に座った。そして野球を観るのだった。試合が始まるとだ。凜が小さな声で言ってきた。

「今日の試合ですけど」

「今日の試合？どっちが勝つか？」

「多分ですけど」

「こつ前置きしてからの言葉だった。」

「阪神が勝ちます」

「それ、わかるんだ」

「選手の皆さんの動きがいいですから」  
「だからだというのである。」

「それで」

「選手の動きがね」

「特にですね」



凜は小さな声だがそれでも言うのだった。

「城嶋選手と金本選手が」

「調子いいんだ」

「絶好調です」

そこまでだとだ。彼女はグラウンドの彼等を見ながら話す。

「今日は」

「じゃあやっぱり今日は」

「はい、勝てます」

「ピッチャーがマエケンでも？」

彼はここで相手のピッチャーの名前を出した。

「それでもなんだ」

「幾ら調子がよくてもそれでもです」

凜の言葉は強いものだった。

「今の阪神の選手達はあの人よりも調子がいいですから」 8

「勝てるんだね」

「はい、そうです」

こう言うのだった。そしてだ。

二人は試合を観る。試合は凜の言葉通り阪神打線が爆発してだ。大差で勝利を収めた。

それを観てだ。将暉は満足した声で言った。

「本当にそうだったね」

「はい、よかったですよね」

「うん、阪神が勝つとね」

それでどうかというのである。

「それだけで日本は元気になるからね」

「元気にですか」

「だって阪神ファンが日本で一番多いじゃない」

今ではそうなのだ。最早巨人ファンよりも多くなっているのである。

それでだ。将暉はこう言ったのである。

そしてだ。上機嫌で凜に話すのだった。

「機嫌がよくなったからね」

「はい、そうしてですか」

「試合が終わったらどうしようかな」

「何処か楽しい場所に行かれますか」

「そうしよう。それでね」

まずはだ。ここだというのである。

「お腹空いたからマクドナルドにまず入って」

「そうしてですか」

「それから居酒屋なんてどうかな」

酒というのだ。

「そこで阪神の勝利も祝ってね」

「そうですね。それじゃあ」

「それじゃあ？」

「いいお店知ってます」

凜からの言葉だ。

「飲まれるのでしたら」

「養老の滝？魚民とか？」

「いえ、チェーン店ではなくて」

居酒屋もチェーン店が多くなっている。またそうした店の酒や料理も実に美味しいのだ。実は将暉はそうした店に行こうと思っていたのだ。

ところがだ。ここで凜が言うのである。

「バーですけど」

「バーなんだ」

「そこでは駄目ですか？」

「っていつかバー知ってるんだ」

将暉にとってはこのことが意外だった。この場合の知っていると通っているという意味である。

「意外だね」

「意外ですか？」

「うん、かなり」

実際にこう言う彼だった。

「それでも。バーだね」

「はい、どうされますか」

「そこ案内してくれるかな」

こう言う将暉だった。

「よかったですね」

「はい、わかりました」

こうしてだった。彼等はマクドナルドの後でそのバーに入る。わざと店の中を暗くして雰囲気<sup>雰囲気</sup>を醸し出させているバーだ。そこに入ったのだ。

入るとだ。すぐにだった。

凜はおずおずとした態度で将暉に言ってきたのだった。

「先にカウンターに行っていて下さい」

「ああ、わかったよ」

何故先に行くかはわかっていた。トイレだ。

しかしそれはあえて言わずにだ。それで一人先にカウンターに座る。

そうしてそこにいとだ。そこに来たのは。

## 第七章へ

## 第六章

何とだ。あのもう一人好きだった黒いゴスロリの少女が将暉のところに来てだ。こう言ってきたのである。

「こんばんは」

「えっ、君は」

「はい」

こう言うのである。態度はおずおずとしたものだった。

「あの、私は」

「あの、まさかと思うけれど」

将暉は事情を察した。そして彼女に言うのだった。

「凜さんだよな」

「はい、そうです」

その通りだというのだ。

「ずっと私のこと見てくれてましたよね」

「うん、それはね」

その通りだと答える。どちらもだ。

「ううん、それにしても」

「ギャップが凄いですか」

「うん、とてもね」

「けれどどちらの私も好きでいてくれてましたね」

凜がここで言うのはこのことだった。

「そうですよね」

「うん、それはね」

その通りだという彼だった。

「その通りだよ」

「どうもです。それで」

「それで？」

「どちらの私も見てくれてましたから」

それでだとだ。凜は話す。

「縁があればと思ってました」

「それはわかったけれど」

「わかったけれど？」

「いや、何でそうして対象的な格好してるのかな」

彼が言うのはこのことだった。

「それは」

「どちらの服も好きですから」

それが理由だった。

「ですから」

「それでだったんだ」

「いけませんか？それは」

「いや、いいよ」

それはいいという彼だった。そうしてだ。

そのままゴスロリの彼女とバーで飲むのだった。彼にとっては幸せな結末だった。相手は一人だがまさに両手に花だった。

二者択一 完

2010・11・5

## 第七章

彼女が戻って来た。しかしだ。

やって来たのはだ。ゴスロリの彼女ではなくだ。彼が好きだったもう一人の相手だ。白服の彼女が微笑んでやって来たのだ。

「お待たせ」

「お待たせてことは」

「そうよ、私よ」

こう言ってであつた。

「凜よ」

「全然違うね」

「けれどどっちの私も見てくれてたわよね」

「うん、それはね」

その通りだという将暉だつた。

「その通りだけれど」

「だから。待ってたのよ」

「このデートを？」

「そう、人は自分を本当に好きな人を好きになるものじゃない」  
相手が好きなら自分もというのだ。無論その逆もある。

「だからね」

「それで今もこうして」

「そういうことよ。それにしても」

「それにしても？」

「本当に全然違う服装だつたのに」

凜が今度言うのはこのことだつた。

「それでも私だつてわかつたのね」

「あつ、うん」

まさかここで別人とを考えていたとは思わなかった。それでの言葉だつた。

そうしてだ。彼は言うのだった。

「まあ。好きだから」

「有り難う。じゃあこれからもね」

「うん、これから？」

「どちらの私も宜しくね」

笑顔で言う凜だった。

こうして将暉は凜と付き合うことになった。彼は何時の間にか両手に花ということになった。相手は一人でもだ。そうなのである。

二者択一 完

2010・11・5

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9063s/>

---

二者択一

2011年5月1日21時55分発行